

[B年] 聖霊降臨節第10主日(2026年7月26日)**【旧約聖書日課】民数記 11章24～29節**

²⁴モーセは出て行って、主の言葉を民に告げた。彼は民の長老の中から七十人を集め、幕屋の周りに立たせた。²⁵主は雲のうちにあって降り、モーセに語られ、モーセに授けられている霊の一部を取って、七十人の長老にも授けられた。霊が彼らの上にとどまると、彼らは預言状態になったが、続くことはなかった。

²⁶宿営に残っていた人が二人あった。一人はエルダド、もう一人はメダドといい、長老の中に加えられていたが、まだ幕屋には出かけていなかった。霊が彼らの上にもとどまり、彼らは宿営で預言状態になった。²⁷一人の若者がモーセのもとに走って行き、エルダドとメダドが宿営で預言状態になっていると告げた。²⁸若いころからモーセの従者であったヌンの子ヨシュアは、「わが主モーセよ、やめさせてください」と言った。²⁹モーセは彼に言った。「あなたはわたしのためを思っ、ねたむ心を起こしているのか。わたしは、主が霊を授けて、主の民すべてが預言者になればよいと切望しているのだ。」

【使徒書日課】**コリントの信徒への手紙一 12章14～26節**

¹⁴体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。¹⁵足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁶耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。¹⁷もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでおいをかぎますか。¹⁸そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。¹⁹すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。²⁰だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。²¹目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。²²それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、

かえって必要なのです。²³わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとし、見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。²⁵それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。²⁶一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

【福音書日課】マルコによる福音書 9章33～41節

³³一行はカファルナウムに來た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「途中で何を議論していたのか」とお尋ねになった。³⁴彼らは黙っていた。途中でだれがいちばん偉いかと議論し合っていたからである。³⁵イエスが座り、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」³⁶そして、一人の子供の手を取って彼らの真ん中に立たせ、抱き上げて言われた。³⁷「わたしの名のためにこのような子供の一人を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしではなくて、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。」

³⁸ヨハネがイエスに言った。「先生、お名前を使って悪霊を追いつけている者を見ましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました。」³⁹イエスは言われた。「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。⁴⁰わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである。⁴¹はっきり言うておく。キリストの弟子だという理由で、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる者は、必ずその報いを受ける。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

【旧約聖書日課】民数記 11章24～29節

24モーセは出て行って民に主の言葉を告げ、また、民の長老の中から七十人を集めて幕屋の周りに立たせた。25主は雲の内にあって降り、モーセに語りかけ、モーセの上にある霊の一部を取って、七十人の長老に分け与えられた。霊が彼らの上にとどまると、彼らは一時の間だけ預言者のようになった〔別訳→預言したが、重ねることはなかった〕。26この時、二人の者が宿営に残っていた。一人はエルダド、もう一人はメダドと言い、名を記された人であったが、幕屋に出かけていなかった。この二人にも霊がとどまり、宿営で預言者のようになった。27モーセのところに若者が走って来て、「エルダドとメダドが宿営で預言者のようになっています」と告げると、28若い頃からモーセの従者であったヌンの子ヨシュアが「わが主人、モーセよ、彼らをやめさせてください」と言ったが、29モーセは言った。「あなたは私のために妬みを起こしているのか。私はむしろ、主の民すべてが預言者になり、主がご自身の霊を彼らの上に与えてくださればよいと望んでいるのだ。」

コリントの信徒への手紙一 12章14～26節

14実際、体は一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。15足が、「私は手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。16耳が、「私は目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるのでしょうか。17もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこで嗅ぎますか。18そこで神は、御心のままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。19すべてが一つの部分であつたら、体はどこにあるのでしょうか。20しかし実際は、多くの部分があっても、体は一つなのです。21目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。22それどころ

か、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。23私たちは、体の中でつまらないと思える部分にかえって尊さを見いだします。実は、格好の悪い部分が、かえって格好の良い姿をしているのです。24しかし、格好の良い部分はそうする必要はありません。神は劣っている部分をかえって尊いものとし、体を一つにまとめ上げてくださいました。25それは、体の中に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合うためです。26一つの部分が苦しめば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれれば〔別訳→栄光を受ければ〕、すべての部分が共に喜ぶのです。

マルコによる福音書 9章33～41節

33一行はカファルナウムに来た。家に着いてから、イエスは弟子たちに、「道で何を論じていたのか」とお尋ねになった。34彼らは黙っていた。道々、誰がいちばん偉いかと語り合っていたからである。35イエスは座って、十二人を呼び寄せて言われた。「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい。」36そして、一人の子どもを連れて来て、彼らの真ん中に立たせ、抱き寄せて言われた。37「私の名のためにこのような子どもの一人を受け入れる者は、私を受け入れるのである。私を受け入れる者は、私ではなくて、私をお遣わしになった方を受け入れるのである。」

38ヨハネがイエスに言った。「先生、あなたのお名前を使って悪霊を追いつけている者を見ましたが、私たちに従わないので、やめさせました。」39イエスは言われた。「やめさせてはならない。私の名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、私の悪口は言えまい。40私たちに逆らわない者は、私たちの味方なのである。41よく言うておく。あなたがたがキリストに属する者だという理由で、一杯の水を飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・7月26日「聖霊降臨節第10主日」の日課主題は「キリストの体」。

・旧約日課は、「民数記」から、モーセの民の長老らに預言する霊が授けられたとされる説話箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、「体のたとえ」で教会のあり方を教える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスの弟子として受け入れるべき者について教える箇所。

旧約日課(民数記 11 章より)

・「民数記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第四巻に位置づけられる歴史物語文書。「出エジプト記」から「申命記」までの四巻で展開される「モーセ物語」の第三部を構成し、シナイ山で諸々の「律法」を授与されたモーセ率いるイスラエルの民が、製作した「幕屋」一式を携えてシナイ山を出発しモアブの平野に至るまでの旅路の出来事を物語る。

・日課箇所は、シナイ山を出発して約束の地カナンを目指す旅を始めたモーセ率いるイスラエルの民が間もなく指導者であるモーセに対して不満を向け始め、モーセが主に泣き言を訴えたことに対して、主が民の長老 70 人に霊を授けてモーセの働きを共に担わせることにされた、という出来事を物語る説話の最母の部分。長老 70 人がモーセと共に働くことをやめさせようとした従者ヨシュアに対して、モーセが自身でもそれを望んでいると告げることで、この説話が閉じられている。

・民を統率するためにモーセと共に働く者が立てられるという逸話は、「モーセ物語」中、シナイ山に至る直前の場面の出来事として、モーセの舅エトロが助言した組織編制の説話がすでに置かれている(出エジプト 18 章)。ただし、そこで描かれているのは、民の不満への対応としての組織化ではなく、民が求める一種の神託の役割をモーセが独占せずにピラミッド型の組織の中に権限分掌する、というもの。もっとも、日課箇所の描写も、最終的には「預言する霊の授与」という表現で事柄が進められており、本質的には、どちらの箇所も世俗の権限と宗教的権限を分けて考えてはいないと見られる。

・「七十人の長老」は、「モーセ物語」中の「シナイ契約締結式」の場面でも登場する(出 24 章)。そこでは、すでに「七十人の長老」がモーセと共に神と対面して会食することを許された者たちとして描かれている。この「七十人」という数は、「モーセ物語」の導入部で示される、族長ヤコブと共にエジプトに移住した一族の人数でもある(出 1:5)。おそらく、この人数と意図的に一致させ、「七十人の長老」がイスラエル十二部族を構成する諸氏族の代表であるとしているのだろう。

・「ヨシュア」は、「モーセ物語」の早い段階からモーセの従者として描かれるエフライム族の人物(出 17:9、民 13:8,16 など参照)。モーセが最後に後継指導者として指名した人物として描かれ(申命記 31 章)、「モーセ物語」を前提として展開する「ヨシュア記」の伏線となっている。

使徒書日課(Ⅰコリント 12 章より)

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に配置された書簡文書。パウロがコリントの教会共同体に宛てて書き送った一連の書簡の内のおそらく最初のもの。コリントの教会は、パウロがコリント滞在中にローマから一時的に移住してきていたキリスト者らによる宣教活動に参入して共同で形成した共同体。ローマ教会の指導者であったペトロ(ケファ)や、エジプト・アレクサンドリアの教会出身の宣教者アポロなど、さまざまな指導的人物が教会形成に関り、構成信者の多様性も非常に高かったと推認される。

・本書簡でパウロは、教会共同体内で起こっている倫理的問題に対して警告をする一方で、多様な考えを持つ信者一人ひとりの行動が原理的には信仰的に自由を保障されているとしつつ、その自由な行動が他者の信仰生活の躓きとなるのであれば抑制的であるべきだ、という共同体倫理を展開している。さらに、「神の教会」として共同体が「一つ」であり続けるべき根源的な土台としてキリストと結ばれる「洗礼」によって「一つの霊」を共通に与えられているという聖霊論に基づく教会理解を示した上で、有機体的組織論を模した「キリストの体としての教会」観を提示していくのが、日課箇所である。

・「体」と訳されているギリシア語「ソーマ」は、物質的な「身体・肉体」を指して用いられる場合もあるが、より概念的に、一体性のある「生物体」や「実体」を指しても用いられる。類語で「肉」と訳される「サルクス」は、物質としての「肉体」を指して用いられる場合が多いが、より抽象的に「肉欲性」を指して用いられる場合もある。両語はしばしば交換可能な用語として用いられるが、パウロは多くの場合に、両語を明確に使い分ける傾向にあり、「体(ソーマ)」は一体性を有する存在を指し示すために、「肉(サルクス)」は神的事であることを指して用いる「霊(プネウマ)」と対義的に、人間的であることを指すために用いている。概して、パウロにおいて「体(ソーマ)」は肯定的な意味合いが強く、「肉(サルクス)」には否定的な意味合いが強い。

・「部分」と訳されているギリシア語「メロス」は、「体(ソーマ)」を構成する「肢体」を意味する語として用いられている。「部分(メロス)」の対義語となるのは、「全体」と訳されている「ホロス」。

・日課箇所を展開するような有機体的組織論は、ギリシア哲学者プラトンの国家観でも比喩として展開されているように、よく知られた比喩的組織論。プラトンの有機体的国家観では、「頭」に位置づけられる指導層と、その他の部分に位置づけられる市民・国民との間に、固定的な上下関係を認めることで安定的な組織・国家を目標とする傾向にある。このような国家観を教会観にそのまま適用しているのが「エフェソの信徒への手紙」でパウロが展開している「キリストの体としての教会」観(エフェ 1:22~23 など)であるが、日課箇所はそのような教会観を展開しているわけではない。むしろ、「キリストの体」という概念を、各部分に等しくキリストと結ばれる「一つの霊」が備わった状態を表すために用い、「全体」としての「体」=教会の中に上下関係が生じることを排除しようとしている。

福音書日課(マルコ 9 章より)

・日課箇所は、前週福音書日課に続いて二度目の受難予告の記事を挟んで展開される主イエスと弟子たちの対話編。前半部分(33~37 節)は「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が「ペトロの信仰告白と主イエスの受難予告」から始まる一連の物語展開の一部として共通に伝えているが、後半部分(38~41 節)は「マタイ」が伝えていない。ただし、「マタイ」は、日課箇所前半部の並行箇所に行先して「神殿税を巡る論争」の説話を挿入している。

・前半部は、弟子たちの間で互いの優位を巡る論争があり、それを受けて主イエスが弟子としての他者に対する姿勢を説く、という場面となっている。「マルコ」は、主イエスの受難予告を三度繰り返し描いているが、そのたびに続く箇所で、主イエスが弟子たちに御自分に従う者としての姿勢を説く場面を配置している(8:32~38、日課箇所、10:35~45)。受難予告が、弟子たちの立場では主イエスという存在の喪失を意味することから、主イエス後の自分たちの集団をどう統率し運営していくのかということが課題になっている、という建付けとされていると考えられる。

・ここで示される、立場の強い者が逆に弱い者に仕えるべきであるという姿勢は、上述のどの箇所でも強調されている。他方で、その姿勢を端的に示すこととして「子供の一人を受け入れる」べきことを説くことは、別の場面として扱われる「弟子たちに拒まれた子供たちを祝福する」出来事(10:13~16)にも共通するもので、主イエスの活動の中で実際に行われていた具体的な事例に基づくものと推認される。おそらく、主イエスは、その活動中で類似の行動を繰り返し行われていたのだろう。

・後半部は、前半部の対話を受けて展開されているが、前半部で「子供」を例示して立場の弱い者へ焦点を向けるべきという姿勢が説かれていたのに対して、ここでは弟子たちと対等な立場で場合によっては対抗勢力となる者たちへの姿勢が説かれている。

・この後半部の対話の発話は、「ヨハネ」という弟子のものとしてされている。「ヨハネ」は、「ヤコブ」の兄弟で、「シモン・ペトロとアンデレ兄弟」と共に最初に主イエスに従った四人の漁師の一人。主イエスが「高い山」などに伴った三人の弟子の内の一人。共観福音書では、ヨハネが単独で取り上げられる場面は少ない。ここには、復活後の教会におけるヨハネ(の教会)の姿勢が批判的に反映されているのかもしれない。

来週の誕生日 (7 月 26 日~8 月 1 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-4「世にあるかぎりの」(= I 62)は、C.ウェスレー(18 世紀英国)の代表的な讃美歌で、彼が自身の回心経験を記念して作詞した。曲は、19 世紀初めにドイツで活躍した音楽家 C.G.グレーザーの曲を 19 世紀米国の教会音楽家 L.メーソンが編曲したもの。1954 年版の曲は日本版独自のもの。
- ・21-55「人となりたる神のことば」(= I 190「あめよりくだり人となりし」)。作詞のウィリアム・W・ハウは 19

世紀の著名な讃美歌作家で、英国教会の主教職の傍ら 60 曲以上の讃美歌を作曲発表している(21-379 番など)。曲は、作曲者不詳だが 17 世紀末の讃美歌集から知られ、メンデルスゾーンのアラトリオ「エリヤ」の合唱にも用いられている。

- ・21-411「うたがい迷いの」(= I 385)は、19 世紀デンマークの文学教授・文学者インゲマンが当時用いられていた聖書日課に基づいて待降節第 2 主日用に作詞。19 世紀後半の英国教会司祭ベアリング=グールドの英訳詞によって英語圏で広く歌われるようになった。曲は、19 世紀英国教会信徒の音楽教師バンブリッジが当時の英国皇太子の病氣回復を祝う式典のために作曲したものだが、近年の讃美歌集ではほとんど用いられていない。

21-4「世にあるかぎりの」**O for a thousand tongues to sing**

1. Oh, for a thousand tongues to sing / My great Redeemer's praise, / The glories of my God and King, / The triumphs of his grace!
2. My gracious Master and my God, / Assist me to proclaim, / To spread through all the earth abroad, / The honors of your name.
3. The name of Jesus calms our fears / And bids our sorrows cease. / 'Tis music in the sinners ears; / 'Tis life and health and peace.
4. He breaks the pow'r of canceled sin; / He sets the pris'n'r free. / His blood can make the foulest clean; / His blood avails for me.
5. See all your sins on Jesus laid; / The Lamb of God was slain. / His life was once an offering made / That you might live again.
6. Glory to God and praise and love / Be ever, ever giv'n / By saints below and saints above, / The Church in earth and heav'n.

21-55「人となりたる神のことば」**O Word of God Incarnate**

1. O Word of God incarnate, / O Wisdom from on high, / O Truth unchanged, unchanging, / O Light of our dark sky: / we praise you for the radiance / that from the Scripture's page, / a lantern to our footsteps, / shines on from age to age.
2. The church from you, dear Master, / received the gift divine; / and still that light is lifted / o'er all the earth to shine. / It is the chart and compass / that all life's voyage through, / mid mists and rocks and quicksands, / still guides, O Christ, to you.
3. O make your church, dear Savior, / a lamp of burnished gold / to bear before the nations / your true light as of old. / O teach your wandering pilgrims / by this our path to trace / till, clouds and darkness ended, / we see you face to face.

21-411「うたがい迷いの」**logjennem Nat og Traengsel**

English Translation by Sabine Baring-Gould

Through the night of doubt and sorrow

1. Through the night of doubt and sorrow, / onward goes the pilgrim band, / singing songs of expectation, / marching to the promised land. / Clear before us through the darkness / gleams and burns the guiding light; / pilgrim clasps the hand of pilgrim / stepping fearless through the night.
2. One the light of God's own presence / on the ransomed people shed, / chasing far the gloom and terror, / bright'ning all the path we tread. / One the object of our journey, / one the faith which never tires, / one the earnest looking forward, / one the hope our God inspires.
3. One the strain that lips of thousands / lift as from the heart of one; / one the conflict, one the peril, / one the march in God begun. / One the gladness of rejoicing / On the far eternal shore, / where the one almighty Father / reigns in love forevermore.
4. Onward, therefore, sisters, brothers; / onward, with the cross our aid. / Bear its shame, and fight its battle / till we rest beneath its shade. / Soon shall come the great awaking; / Soon the rending of the tomb! / Then the scatt'ring of all shadows, / and the end of toil and gloom.